

第2章 資料と先行研究

1. 資料について

本論文で主として用いる資料は、室町期抄物の一つ、惟高妙安講述の『玉塵抄』とその原典である元の陰時夫選述の『韻府群玉』である。この二つの資料を中心として、本論文で用いる他の室町期の抄物や韻書また辞書などについて述べる。

1.1 『韻府群玉』

『韻府群玉』は陰時夫の撰述する20巻106韻の韻書で、元代に成立した。その後、元統2年(1334)に増修本が出現し、これが現存最古のテキストとなっている。

『韻府群玉』は、元代から明代にかけて流布した。日本でも、室町期によく利用され、五山版も刊行された。

『韻府群玉』は、掲出字に対して最初に反切を加え、次にその掲出字を末尾に含む、二字、三字もしくは四字の熟語を挙げ、その後それらの熟語に対して注と出典とをそれぞれ付記している。『韻府群玉』より後に成立した『洪武正韻』(1375)や清代に勅撰された『佩文韻府』(1711)等も、この『韻府群玉』の体裁を踏襲したものと見なすことができるので、韻書の史的研究には必須の文献であると言われている¹。

『玉塵抄』が直接講述の対象とした『韻府群玉』のテキストについては、中田祝夫(1970a)に詳しい。中田によれば、『韻府群玉』の序文に、元の大徳11年(1307)・至大3年(1310)・

¹ 書誌的な詳細については、大友信一・木村晟(1998)『韻府群玉』(国立公文書館内閣文庫蔵 古活字版)「解題」に詳しい。

延祐元年(1314)等と見えるところから、惟高の依拠したものは原撰本ではなく、朝鮮覆刊本と、それを基にした南北朝期刊行の五山版、更に時代の降る古活字版としている。さらに、柳田征司(1998)は、『韻府群玉』の伝存諸版の関係を検討した結果、抄者惟高妙安は、元統2年版『韻府群玉』を用いつつ、他系のものも参照して『玉塵抄』を作成したと述べている。そして元統2年増修本は、国内では、米沢図書館と東北大学付属図書館に伝存するが、東北大本は巻十五に後の写本が入っており、また文字を訂正しているところも多いことから、『玉塵抄』の研究においては米沢図書館本を用いるのがよいとしている。本論文は柳田の説に従い、『韻府群玉』については主として米沢本によることにする。

1.2 『玉塵抄』

『玉塵抄』全55冊は、京都五山、相国寺の学僧惟高妙安(1480~1567)²が講述した『韻府群玉』の講述本である。『韻府群玉』全20巻のうち、第1巻「一東」から第6巻「七陽」に至るまでに挙げられた標出字、およびそれを構成要素とする熟語成句について講述している。その講述は『韻府群玉』の単なる語学的な解釈に留まらず、広く中国と日本の諸般の事情・事物に関することにまで及んでいる。一方、日本語史的に見ると、室町期の口頭語を基調として、俗語を交えながら自由に語っているところに特徴が認められる。このような性格から、中世語資料として、また室町後期の口語資料

²惟高の経歴は本論文に深く関わるところがあるので、そのおおよそを、今枝愛真(1966)により紹介しておく。諱は妙安、近江の人、夢窓派の瀑岩等紳の法をついだ。瀑岩・景徐・月舟らに学び、伯耆の山名氏にまねかれて伯耆・出雲にとどまること三十年、尼子氏とも関係をもった。のち相国寺・南禅寺に住し、鹿苑僧録をつとめた後、相国寺の光源院に退休した。詩文集『万巢集』、『韻府群玉』を抄した『玉塵』、『詩学大成』を抄した『詩淵一滴(詩学大成抄)』がある。(『禅宗の歴史』, p.144)

として『玉塵抄』は高く評価されている³。なお、『玉塵抄』の写本は、国立国会図書館本・叡山文庫本・東京大学国語研究室本の三本がある。国立国会図書館本と叡山文庫本は完本である。東京大学国語研究室本は12冊しかない欠本である。本論文では『玉塵抄』は主に国立国会図書館本を用いるが、「清」「濁」や反切に関わる記事において、違いが認められる場合は、叡山文庫本も参照した。

1.3 『玉塵抄』以外の抄物

本論文で使用した『玉塵抄』以外の室町期抄物は、五山系13点と博士系5点である。五山系と博士系とに分けて、書名、講述者、成立年、抄テキスト、冊数を示す。(本論文で調査した抄物以外の日本の文献については、本論文の末尾【資料】参照)

a. 五山系抄物(13点)

- ① 『杜詩統翠抄』・江西龍派・1439・『統抄物資料集成』第1巻～第3巻清文堂1992・19冊
- ② 『漢書列伝竺桃抄』・竺雲等連・1458・『統抄物資料集成』第4巻清文堂1992・1冊
- ③ 『漢書列伝綿景抄』・綿谷周麿・同前・1468・1冊
- ④ 『史記抄』・桃源瑞仙・1477・『抄物資料集成』第1巻清文堂1971・20冊
- ⑤ 『周易抄』・柏舟宗趙・1477・『周易抄の国語学的研究 影印編上下』清文堂1972・6冊
- ⑥ 『漢書景徐抄』・景徐周麟・1477～1496・『統抄物資料集成』第4巻清文堂1992・3冊
- ⑦ 『漢書列伝景徐抄』・景徐周麟・1480・同前・1冊
- ⑧ 『山谷詩抄』・一韓智翊・1508以前・『統抄物資料集成』第6巻清文堂1992・6冊

³ 『玉塵抄』の日本語史資料としての価値については、出雲朝子(1982)、柳田(1998)参照。

- ⑨ 『四河入海』・笑雲清三・1534・『抄物資料集成』第2～5巻清文堂1971・100冊
- ⑩ 『中興禅林風月集抄』・惟高妙安・1540以後・『新抄物資料集成』第1巻清文堂2000・1冊
- ⑪ 『詩学大成抄』・惟高妙安・1561・『詩学大成抄の国語学的研究 影印編上下』武蔵野書院刊行1975・10冊
- ⑫ 『古文真宝桂林抄』・笑雲清三・1482・『続抄物資料集成』第5巻清文堂1992・2冊
- ⑬ 『百丈清規抄』・東帰光松・1386～1462・『続抄物資料集成』第8巻清文堂1992・1冊

b. 博士系抄物(5点)

- ① 『論語私抄』・清原宣賢・1475以前・坂詰力治『論語抄の国語学的研究 影印編上下』武蔵野書院1987・5冊
- ② 『蒙求聴塵』・清原宣賢・1523・京都大学電子図書館2002・2冊
- ③ 『蒙求抄』・清原宣賢・1529・『抄物大系』勉誠社1971・7冊
- ④ 『莊子抄』・清原宣賢・1530・『続抄物資料集成』第7巻清文堂1981・5冊
- ⑤ 『毛詩抄』・清原宣賢・1535・『抄物大系』勉誠社1971・20冊

1.4 中世期の辞書・韻書

本論文は、『玉塵抄』における字音の系統や清濁、反切など、漢字音に関わる講述を室町期の他の文献におけるそれと比較するために、次の辞書、韻書を用いる。すなわち、辞書としては主に同時代の『下学集』『文明本節用集』『倭玉篇』を、また韻書としては、慶長17年版『聚分韻略』を用いる。それぞれを簡単に紹介しておく。

a. 辞書

- ① 『下学集』

川瀬一馬(1986)⁴は、『下学集』の日本語史的な資料性について、「…編纂当時の実生活に
 応じて生まれたものであるから、語彙の採択に当たっても、多く当時常用の語が収録せら
 れており、これが当時の国語研究の資料として下学集に重要な位置を與へるのである。
 且つ又、その語彙には片仮名を以って、振り仮名を施しており、それが当時発音の儘を伝
 へているから、国語資料としては、一層有用である」と指摘している。つまり、字音に限
 ってみると、掲出字の当時における一般的な読み方を構成しているものが掲げられている
 ということになる。本論文では古本下学集を用いる。

②『文明本節用集』

中田祝夫(1983)によると、『文明本節用集』は、「…室町時代中期のもの、おそらく一六
 世紀の初頭のころのものであろう」という。同書は数ある『節用集』中、最古の『節用集』
 の一つであり、そして漢字漢語に片仮名音注を施しているので貴重な字音資料となる。と
 ころで、この辞書の漢字漢語の音注は、漢音＝朱筆、呉音＝墨筆、唐音＝朱筆と色分けさ
 れている。このように当該字音の系統が示されていること、漢籍からの引用文以外のとこ
 ろでは、全漢字に対してその漢音が示されていることなどから、室町期字音資料としては
 きわめて利用価値が高い。詳しくは、中田祝夫(1970b)、湯沢質幸(1976)参照。

③『倭玉篇』

中田祝夫(1983)は、『倭玉篇』は「…特定の著者の責任のないものであるから、誰でも入
 手すれば、勝手自由に加筆削除といった増補改編がなされたものである」と指摘している。
 このような点においては辞書としての規範性に疑いを持たざるをえないが、いずれの系統
 の『倭玉篇』であれ、その字音の量は『下学集』や『節用集』に比肩できるほど多い。こ
 のことや当時における漢和辞典は『倭玉篇』くらいしかないこと、いろいろな版本や写本

⁴川瀬一馬(1986)『増訂古辞書の研究』第三篇第二章第九節，三 雄松堂出版

が作られていることなどから、当時においても相当広く使用されていたに違いないと考えられる。本論文では慶長 15 年版を用いる。

b. 韻書

①『聚分韻略』

『聚分韻略』には数多くの版本、写本のあることが知られている(奥村, 1973)。本論文では慶長 17 年版を用いるが、奥村は、この書の字音について「概ね、漢呉音カナ、唐音カナそれぞれの定位置めいたものがあり、原則として、前者は見出し字の右側、後者は左側に付されるのである。」と述べている。このように慶長 17 年版『聚分韻略』は文明本『節用集』のような色分け表記こそないが、位置の違いによって、漢呉音と唐音を区別している点において、『文明本節用集』と類似する。

2. 先行研究

室町期の漢字音研究に関する先行研究は必ずしも多くない。ここでは、抄物を資料とした漢字音研究について述べる。

まず、『玉塵抄』を資料とした漢字音研究としては、出雲朝子(1963)「室町時代における『寮』の字音について」が挙げられる。出雲は室町期において、「寮」は、役所の意及び読書音としては合音、禅林用語及びそれに由来した語においては開音、というように、使い分けられていたとする。そしてそれを裏付けるにあたって、『玉塵抄』の記述を用いている。

すなわち、『玉塵抄』の「寮」の項において「ココラニハヒロカツテリヤウト云ソ、ココハスホメテレウト云ソ」と述べられていることから、リヤウという音は、安定した字音として京都を中心とする知識人社会で、さらにはその語の性格から、広く一般社会でも用いられていたと論じている。一方、出雲は、「寮」の字音の分布を明らかにするために、『玉塵抄』で寮の字音に関連している「ココラ」について、それが具体的に何を意味している

のかを述べている。この「ココラ」については、『玉塵抄』における呉音、漢音の分析に関連して、本論文第5章で取り上げる。このような議論を積み重ねて、出雲は、開音リヤウは禅林用語として用いられていたとする。そしてさらに、リヤウがいつ頃から開音に発音されるのが原則になったのかについても検討を加えて、リヤウは禅宗の渡来によってもたらされた唐音であり、禅林用語から一般寺院の用語、そして一般語へとその用いられる範囲を拡大していったと指摘している。

一方、『玉塵抄』以外の抄物を資料とした漢字音研究としては、来田隆(1971)「抄物に於ける『清』『濁』注記について」、松井利彦(1971)「近世漢学における漢字音の位相」、湯沢質幸(1981)「室町期禅林における声点一百衲襖」などが挙げられる。

来田は、漢字音について「清」「濁」注記がある抄物を調査し、「清」「濁」注記を加えた講者の意図を明らかにしつつ、その時代的背景を考えている。まず、「清」「濁」注記の存する抄物を調査した結果を、以下のようにまとめている。

- (1)「清」「濁」注記の存する抄物は、漢籍の抄物に多い。
- (2)「清」「濁」注記の存する抄物は、五山禅僧の手に成るものが多い。博士家学者のもの、清原宣賢の抄物がほとんどである。
- (3)漢字音についての「清」「濁」注記は、極めて多い。一方、和語についての注記は、6例にすぎない。
- (4)漢字音についての「清」「濁」注記においては、「清」注記が332例中294例と圧倒的に多い。

これに加えて、漢籍の抄物における「清」「濁」注記された漢字の、『韻鏡』図上における分布を調べて、「清」注記された漢字は韻鏡濁音字に集中的に分布していることを指摘し、これは、「清」「濁」注記の意図が漢籍の読書音(漢音系)を標示しようとしたものであることを予測させると主張している。さらに、来田は、日本漢字音史の上から見れば、鎌倉期

以降、僧侶が漢籍の移点をするのが多くなるのにもない、漢籍の訓読に呉音が混入することも多くなったので、「清」「濁」注記をわざわざしなければならなくなったこと、つまり、この注記は正統な読書音(漢音系)を伝えることが、当時既に困難になっていたことを物語っていると述べている。来田には、『玉塵抄』の清濁注記について触れているところはないが、本論文では第6章で、来田を踏まえながら、『玉塵抄』における清濁について検討することにする。

松井は、中村惕齋(1629～1702)の『小学示蒙句解』(元禄3年(1690)序)を取り上げ、この書の中の漢文訓読と講釈とにおいてそれぞれどのような漢字音が使用され、そしてそれらの漢字音はどのような位相的対立をなしているのかを調査して、近世漢学における訓読音と講釈音の平均的な性格を考え、訓読音が俗間通用の字音に与えた影響の可能性について述べている。『小学示蒙句解』は近世の書であり、また抄物ではないが、この論文の中で彼は、『蒙求抄』と『桂庵和尚家法倭点』を例にとり、中世の漢学において、どのような漢字音が使用されていたかを述べている。すなわち、清原家の『蒙求抄』を通して、博士家の訓読文の字音は一般通用の字音とかけ離れていること、そして『桂庵和尚家法倭点』を通して、桂庵和尚はそれに反対意見を唱えていることを指摘している。

湯沢は、五山僧桃源瑞仙(1430～1498)の講述になる『百衲襖』を通して、室町期禅林における声点や声調に対する知識や理解、またその取り扱いについて次のようなことを明らかにしている。

- (1) 『百衲襖』の声調注記の中であげられている声調の内、呉音漢音無指示のものは漢音のそれである。
- (2) 『百衲襖』の声点によると、室町時代の遅くとも千五百年代あたりの禅林には、八声体系の声点加減、すなわち軽重の違いを声点位置上の相違でもって示す方法はなかった。

『玉塵抄』の中では声点は注記されていないので、声調については本論では触れないことにする。

3. まとめ

以上、室町期抄物を取り上げた先行の漢字音研究をまとめてみると、その目的は個別字音の研究、清濁注記の研究、声点の研究などに向けられており、『玉塵抄』を漢字音研究資料として見て、それについて考察し、またそれを用いて当時の漢字音研究のありようを追究している研究は皆無に近い。

このような現状を踏まえて、本研究では、『玉塵抄』を主な資料として、当時の禪僧たちにおける呉音漢音の問題、清濁の問題、字音認定の方法、読み癖の問題など、漢字音に関わる研究の実態を明らかにしていきたい。

【参考文献】

- 出雲朝子(1963)「室町時代における『寮』の字音について」『国語学』54
 (1982)『玉塵抄を中心とした室町時代語の研究』桜楓社
- 今枝愛真(1955)「玉塵の著者について」『日本歴史』84
 (1966)『禅宗の歴史』改定増補版 至文堂
- 川瀬一馬(1986)『増訂古辞書の研究』雄松堂出版
- 来田隆(1971)「抄物に於ける『清』『濁』注記について」『国語学』84
- こまつひでお(1970)「不濁点」『国語学』80
- 中田祝夫(1970a)抄物大系別刊『玉塵抄』(国立国会図書館本) 勉誠社
 (1970b)『文明本節用集研究並びに索引』風間書房
 (1971)『古本下学集七種研究並びに総合索引』風間書房
 (1983)「日本の古辞書」『古語大辞典』「附録」小学館
- 松井利彦(1971)「近世漢学における漢字音の位相」『国語国文』40-5
- 柳田征司(1975)『詩学大成抄の国語学的研究研究編』清文堂
 (1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
 (1998)『室町時代語資料としての抄物の研究』武蔵野書院
- 湯沢質幸(1976)「文明本節用集における音注加点」『言語と文芸』82<復刊7>
 (1978)「室町時代における清濁と呉音, 漢音—文明本節用集を中心として」『国語国文』46・2
 (1981)「室町期禅林における声点—百衲襖」『山形大学紀要(人文科学)』9-4
 (1987)『唐音の研究』勉誠社

【資料】

- 大友信一・木村晟(1998)『韻府群玉』(国立公文書館内閣文庫蔵 古活字版) 大空社
- 奥村一雄(1973)『聚分韻略の研究付古本四種影印慶長版総索引』風間書房
- 中田祝夫・北恭昭(1966)『倭玉篇慶長十五年版研究並びに索引』勉誠社

中田祝夫(1970a) 抄物大系別刊『玉塵抄』(国立国会図書館本) 勉誠社

(1970b) 『文明本節用集研究並びに索引』 風間書房

(1971) 『古本下学集七種研究並びに総合索引』 風間書房